1 月 7 日

「あなたには将来がある」

箴言 23:18

武安　宏樹 牧師

「わたし自身、あなたがたのために立てている計画をよく知っている～主のことば～。それはわざわいではなく平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。」(ｴﾚ 29:11)とあるように捕囚前の末期症状に、エレミヤは偽預言者が気休めを語るのと異なり、正面からさばきを語りつつ、捕囚の彼方にある 70 年後のヴィジョンまで示すも、民は「その後」のことより、今すぐ「将来」「希望」の実現を願います。未来を思い描けない人々の心の闇に、断罪や正論ありきでなく、慰め主の深い同情をもって寄り添えたら最善です。主イエスは自らへりくだり、罪人と共に滅びの淵から共に主を見上げました。私たちも自身の絶望体験を振り返って、そこからどのように主が引き上げてくださったことか。世の仕事に意味が見出せずに自分を見失っていた３年間、追われるようにして退職後に宣教団体の働きに、充実感と不安定感の３年間、転がり込むように入学した神学校で、学びと奉仕に励む一方で桎梏の３年間、以上の荒野を引き回され、母教会で伝道師として備えられる仕上げの３年間。ある聖日に語ったヨブ記説教から、聖霊の働きに時があることを悟りました。

「希望」の動詞形「待ち焦がれる」「心待ちにする」から、背後に「忍耐」の意が、隠されています。捕囚を前にした民は不満＆不安と、即効性のある処方箋を求める心に満ちていました。けれども主はカナンを前に足踏みした荒野 40 年、異国で自分が何者か問われたバビロン 70 年、時間稼ぎと言いたくなるような、遠回りを通して、主は私たちとの関係に介在している不純物を取り除きます。農夫の刈り込み(ﾖﾊ 15:)、毒麦の焼却(ﾏﾀ 13:)で、自分本位の枝葉が撤去され、スッキリして向こうの世界、待ち望んでいた将来と希望が見えるようになる。これこそ聖化で、罪を赦された確信と共に主にいよいよ近づかんと志します。パウロの名言「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む」(ﾛﾏ 5:4 新共)主が示された将来と希望を見るまでに、信者は以上３段階を踏む必要がある。自分が経験したこととして、隣人の苦境を受け止めた上で、ある時は励まし、ある時は背後で祈り、霊的な洞察を得ながら適切に関わることが出来ます。罪人の無責任による「わざわい」さえ、「平安を与える計画」へ動機付ける主は、受けた愛を還元することを通して、教会の交わりは似姿まで成長するのです。

1 月 14 日

「真理を知っているから」

Ⅰヨハネ 2:18-25

武安　宏樹 牧師

「今は終わりの時」「反キリスト」など、おどろおどろしい表現が並びますが、「終わりの時」とは特定の年月日を指定しておらず、主が地上に来られてから、現在までの、教会が宣教を担いつつ再臨を待ち望んでいる幅のある期間です。「反キリスト」は本書だけに登場しますが、偽教師＆偽預言者＆偽兄弟などの、「偽」がつく者全体を差し、ヨハネは教会内の「仲間」が聖書的教えから逸脱し、兄姉を引き抜いたり教会を混乱させたりして、信仰の弱い人が巻き込まれる、一見して素晴しい人に思えるが、巧妙に浸透する厄介な輩がいると語ります。「彼らとは地上的交流を共有するが､天的出自は共有していない。ただ終わりの日に麦と毒麦との完全な分離が明らかにされるのである。」(ﾃｨﾝﾃﾞﾙ注解)そんな人々がいるのかと特定することは、私たちのすることではありません。「反キリスト」には定冠詞が無く、人でなく背後の霊の見分けを求められます。まず私たちは御言葉に親しみ、知識だけでなく受肉して悔い改めに導かれて、聖霊の満たしを受けつつ、古い自分を十字架につけ新しい力を受けましょう。「出て行った」人は共通して、明け渡し(＝私)を拒む頑なな部分が見られます。

「彼ら」に対し「あなたがた」が対比＆強調され、出て行った人を呪うよりも、信者を励まそうとしています。直訳「あなたがたには･･･ある(英訳'have')」目的語が無いので変ですが、最近の日本語で「持っている人」などと言います。運やツキといった巡り合せでなく、心理学的な行動パターンからでしょうが、「あなたがた」キリスト者は何を持っている、いや何によって持っているのか。それが「聖なる方からの注ぎの油」。旧約では預言者＆祭司＆王の即位の際に、選ばれた少数の特別な者に注がれたのが、今や全ての信者に特権的に注がれ、私たちが聖書の真理を正しく知るために、聖霊が油を注いで光を灯されます。さらに私たちの内なるエンジンが、錆びつかせることなくなめらかに回って、加えてキリストの肢体の一部の私たちに、信仰にとどまるように励まします。「とどまる」恵みをぶどうの木に喩え(ﾖﾊ 15:5)、「持っている人は豊かになり」山上の説教で語られました(ﾏﾀ 13:12)。外の方が楽しく思えることもあれど、素晴しい宝を内に宿している実感から、私たちは主にとどまることができる。出た人が戻るよう祈りつつ、私たちは真理を知る者として愛し合いましょう。

1 月 21 日

「クリスチャンの３つの喜び」

ローマ 5:1-11

武安　宏樹 牧師

こうして、わたしたちは、信仰によって義と認められたので、わたしたちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。 神との平和とはイエス様を信じて仲良くなること。

①神の栄光を喜ぶ（２節）「神の栄光にあずかる望みを喜んでいます。」
神の栄光とは？　あなたの望みは何ですか？
cf. ヘブル人への手紙 12：1-3
私たちはこの世で１番でなるのではなく、人生のゴールは天国です。

②苦難を喜ぶ（３～８節）「苦難さえも喜んでいます。」
苦難が喜び？「苦難が忍耐を、忍耐が品性を、希望を生み出す」
艱難を喜ぶとは「それは、苦難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと、私たちは知っています。」 そして、この希望は失望に終わることがありません。
希望は失望に終わることはない。神の愛のゆえに。
聖霊によって神の愛が私たちの心に満たされるとき、平安と喜びと希望に満ち溢れ、どんな患難が襲って来ようとも、それさえも喜ぶことができるようになります。

③神を喜ぶ（９～11 節）「それだけでなく、私たちは神を喜んでいます。」(11)
何が一番の喜び？　神こそ喜び。

1 月 28 日

「来臨のときに」

Ⅰヨハネ 2:26-29

武安　宏樹 牧師

終わりの世に惑わしの霊は片時も休まず、信者は戦いを余儀なくされます。ヨハネの視線は出て行く者にではなく、「あなたがた」キリスト者に向きます。マタイ 25 章はともしびを手に花婿を迎える娘たちと、しもべの能力に応じて、各タラントの財産を預けるたとえの後に、羊と山羊の選別の話が続きますが、私たちは救いの油を常備し財産を活用して、善い行いに投資が求められます。「御言葉は客観的な防護策で、御霊の注ぎは主観的な体験であり、使徒による教えと天の教師のいずれもが、真理のうちにとどまるのに必要」(ﾃｨﾝﾃﾞﾙ注解)要するに御言葉と聖霊体験のバランスを取ることが、信仰生活に必要ですが、言うは易く行うは難しです。いずれか極めるだけではつかめないということ。「正しすぎてはならない。悪すぎてはいけない。一つをつかみ、もう一つを手放さないがよい。神を恐れる者は、この両方を持って出て行く。」(伝道 7:16-18)知識も知恵も必要。祈りと黙想、善行に励むことも。されど程度が過ぎると、高慢や魔境に入り訳が分からなくなる。反対に何もしないと霊性が鈍ります。改めて信仰のバランスを保つのは難しく、聖霊だけが中庸を教えてくれます。

「その注ぎの油が、すべてについてあなたがたに教えてくれます。」(27 節)は、「聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え･･･」(ﾖﾊ 14:26)の繰り返しですが、主イエスは去られた後の聖霊の臨在に、ヨハネは「すべて」に力点を置くので、バランスの欠如した私たちには、「聖霊」が「すべて」を究める二重の恵みです。御言葉の字面に留まらず、文脈や行間や著者の息遣いまで恵みを受け取って、使徒の言い伝え(＝神学)をマニュアル通りでなく、知的霊的に体験して悟る。教えられたとおりのことを聖霊が深めることで、いまだかつて教えられない、新しい発見に目が開かれる。御言葉にも教会にも次第に情熱が失われるのは、聖霊だけが目を開かれることを知らず、自分の力で解釈＆適用するからです。聖霊は教会を生み出す動力ですから、人の行動や思考回路と雰囲気に働かれ、惑わしの霊を見破ります。学者や霊能者など特別な賜物も素晴しいですが、中途半端で取柄の無いと思われる凡人こそ、聖霊が働きやすい器となります。「すべて」からは過去と現在を思うだけでなく、再臨こそ救いの完成と語って、逆算して教勢停滞の我が国で未来を待望する、着実な歩みを可能にします。

2月4日

「私たちは神の子ども」

Ⅰヨハネ3:1-3

武安　宏樹 牧師

私たちキリスト者は願望や努力以前に、信じるだけで神の子です(ﾖﾊ1:12)。肉の家族同様、子から父母の子になりたいと認知を求めることはありません。乳を飲ませ、抱き、食物を与え、歩き方を教えるのは他の動物も行いますが、社会で生きるために何が正しいか悪いかの知性を教え、処世術にとどまらず、試練を乗り越えて生きる意味を説き、自立のために二人三脚で共に歩みます。人の成長は知的＆情緒的＆経済的自立と、神を愛し人を愛するためにあって、人の家族は親から自立しますが、私たちは神と共に自立する特権があります。家庭環境の格差で若者の人生が左右されることを、「親ガチャ」と言いますが、人間的見方として恵まれている人とそうでない人が居ますが、共通するのは、神の前に罪人で受けるべき祝福を受けられず、自立できず、人生経験積めど、何のため生きているか分からず、他の神々や自分や有力者を頼りに生きつつ、自分を太古の昔から造られ知られ、愛して救おうとされることを見出さずに、罪を重ねて際限無く努力する空しい人生です。神の赤子として抱かれる時に、私たちは安心して力を抜いて甘えるように乳を飲み、信頼するのが大事です。

一方で神の子どもである事実を、ありのまま受け止めることに苦労します。どうしても両親から、次いで先生や先輩や友人の言葉に傷つき影響されます。違和感と不適応を感じつつ、それでもキリストにとどまることを求めます。「私たちの交わりとは、御父また御子イエス･キリストとの交わりです。」(1:3)受けるだけでも求めるだけでもない、三位一体に囲まれ両側通行の交わりで、御言葉と一つにされる臨在の中に在れば、罪を犯し続けることはありません。以上の結果は「キリストが現れたときに、キリストに似た者になること」(2節)その時100%似姿に変えられます。では現状は40%か70%か分かりませんが、赦すこと、愛すること、自制することに難儀して、砕かれ祈り求める現場で、聖霊は着実にきよめてくださいます。その御手に赤子のように裸になって、在天の神と、天地をつなぐキリストの十字架と、我が内に在す聖霊を確信し、縁組された親子関係に立って、祈りの手を上げることから全ては始まります。「御霊によって歩みなさい。そうすれば、肉の欲望を満たすことは決してありません。」(ｶﾞﾗ5:16)御言葉は適用すると主の真実と自分の成長が分かります。

2 月 11 日

「悪魔のわざを打ち破るため」

Ⅰヨハネ 3:4-10

武安　宏樹 牧師

本書の流れをおさらいすると、一つ目に神とキリスト者との「タテ」の関係。罪の存在を否定し自分から肉体を切り離して、霊的体験で救われると偽装し、その暁に罪を犯しても構わないと惑わす、不法の輩「反キリスト」がいる一方、神の前に自分の罪を認めて、キリストの赦しの中を歩み続ける信者がいます。つまり罪は無いと言いつつ奴隷となる者と、罪に敗北しているように見えて実は勝利している者という逆転現象で、キリストの救いは恐ろしく公平です。されど救われてからの過程は、賜物と献身の違いで各人各様の成長をします。二つ目に「ヨコ」の関係。霊性は個人的＆神秘的に非ず互いに愛し合うことが、バロメータとなります。偽り者は自己愛に熱心でも隣人愛で馬脚を現します。

本日の箇所は以上を踏まえて読むなら、罪と聖化の関係に目が開かれます。４節「罪」の一つ目は定冠詞単数で、一つの罪を犯しても不法の誹りを免れず、二つ目は無冠詞単数から、人の罪の性質や存在がそもそも不法だと示します。パリサイ人の如く小細工で律法を守るとか、金や善行では無罪になりません。５節「罪」の一つ目は定冠詞複数で、主は世の全人類の罪全てを取り除くため、二つ目は無冠詞単数から、キリストは存在的に人と違って罪は見出せません。かくて６節「凡そ主に居る者は罪を犯さず、凡そ罪を犯す者は未だ主を見ず、主を知らぬなり」（文語）となりますが、８節「罪をおこなふ者は悪魔より出づ」罪を犯して転落、悔い改めで復帰を繰り返し、不安に囚われないでしょうか。

日本語に訳出されませんが、６節「とどまる」「罪を犯しません」「罪を犯す」８節「罪を犯している」（２回）９節「罪を犯しません」「とどまっている」「罪を犯す」10 節「義を行わない」「兄弟を愛さない」以上は継続を表す現在時制ゆえ、キリストにとどまるにも罪を犯すにも、いずれに帰依するか意志が必要です。偽り者は真理を知りつつ意識的に不法を生き甲斐とし、確信犯的に罪を犯し、教会に潜入して未成熟な信者を引き抜こうと、羊の皮を被った狼のようです。私たちは習慣的に犯す罪があるかも知れない。これでは救われないのでは？たしかに罪を犯せば聖霊が悲しまれ、託された証しの務めが止められますが、贖い主の証印は病根を断ち、悔い改めで「打ち破り＝解放」を日々体験します。

2 月 18 日

「行いと真実をもって愛し合う」

Ⅰヨハネ 3:4-10

武安　宏樹 牧師

10 節末尾～４章で、偽り者が決定的に欠如している「愛」について語ります。互いに愛し合うことは救いの条件ではないので、地獄に落とされはしません。されど聖霊の働きに逆らって頑なに憎むならば、地獄の如き煩悶を喫します。よって愛せぬ人がいるならば、罪を認め御前にへりくだり赦しを得ましょう。自らの愛の無さを認めて、聖霊の働きによって愛し合う群れが主の教会です。「初めから聞いている」(11 節)とは、新約聖書では主イエスの戒め(ﾖﾊ 13:34)、旧約聖書では人類最初の出産が殺人者となる、カインの近親憎悪から(創 4:)、素直に非を認めず食い下がる意欲も無く、傷ついたプライドで邪魔者を消す、まさに「兄弟を憎む者はみな、人殺し」(15 節)私たちもみなカインの末裔です。

「すなわち自分と他人の命を保持するため出来る限り注意深く研究し、合法的に努力すること～慈悲深い思い、愛、同情、柔和、親切により、穏和な礼節ある言葉遣いや行為、忍耐、進んで人と和らぐこと、傷害を忍び耐えまた許すこと、罪の無い者を保護し防御すること」(ｳｪｽﾄﾐﾝｽﾀｰ大教理 135) 「悪をなす者だけがこの戒めの違反者ではない。隣人に善をなすことができ、危難災害の起こらないよう未然に防ぎ、保護し、救助できながらそれをしない人も同罪である。隣人への愛を拒み、助けられたはずの善行を奪ったからである。」(ﾙﾀｰ大教理)

17 節で愛の不作為についても断罪します。改めて私たちは愛し合うことに、誇れるものがありません。牧師は信徒以上に嫉妬＆功名心＆不作為の誘惑に、悪魔から絶えず攻撃を受け、「世」からの愛を亡きものにする圧力は苛烈です。13 節で原文は「世」の直後「私たちは～」で、キリストの贖いで愛を知るに至る、「捨てて」は一回限り完結の過去時制で、罪人の捨てきれない自己愛と対照的、「分かった」は完了時制で過去に知り現在まで、主が愛を教え続ける恵みです。ただ十字架を見上げるならば、聖霊がきよめと奇跡をもって愛し合えるよう、キリストの内に在る私たちは導かれ、かくて「兄弟」(複)にいのちを「捨てる」(現在時制で継続の意)者と成ります。傷つけられた人を未だに悪く思ったり、苦手な人の陰口や、体裁良い返答で他の愛する選択肢を捨ててはいませんか。愛せないと悟るなら、主にあって愛を受け成長しきよめられ甲斐があります。

2 月 25 日

「御霊による平安」

Ⅰヨハネ 3:19-24

武安　宏樹 牧師

「行いと真実をもって愛しましょう」(18 節)を受け、「私たちは～神の御前に心安らかでいられます」(19 節)互いに愛し合う真理が神との関係を深めます。世の言葉に良心の呵責があります。席を譲らなかったり物を盗もうとしたり、愛は無い訳では無くても配慮の欠けた言動、疲れると感情的に怒ってしまう。すべきことをしなかったり、逆にすべきでないことをしてしまったりします。苦々しい思いを抱えることは良いことではなく、謝罪と許しが必要ですが、それで万事うまくいくとは限らないのが難しいところで、言葉は内面から、出てこないと信用されません。神を知ることでも人を知ることでも共通して、相手を知ろうと努めることから関係が深まります。好きだから優しいからで、男女関係が立ち行かないのと同様に、痛いことを言われ愛に難儀しながらも、それでも捧げるのが人との関係であり、神との関係です。真実に捧げるなら、自分が出来ることの限界が分かります。あわせて相手の限界も分かります。行いにも言葉にも基本的に表すべきですが、控えた方が良い時もあります。以上の分別をキリスト者は、祈りと御言葉のコミュニケーションで弁えます。

「神は私たちの心よりも大きな方であり、すべてをご存じだからです」(20 節)こそ「心安らか」の基盤です。自分の罪深さに救われていないかと不安になり、人を傷つけ心穏やかでない時も。落度なくても人の冷たい態度が刺さります。そういう時に人の業で詰めすぎるのも駄目ですが、逆に人の知恵で身を引くのも良くありません。責められている心を、いやし慰めるのは神のみです。全知全能の方の前だからこそ謙虚でありながら、深い人間観を持てるのです。「御霊の実は、愛、喜び、平安」(ｶﾞﾗ 5:22)左記は聖化によるので時間かかれど、着実に御霊は実を結ばせます。神はどのように大きな御方かを想像しながら、自分の限界だけでなく能力と賜物も見出し、目の前の問題への傷ついた感情、恐れに止まらずに別の視点に目を開かれ、心空しく期待して祈り始めること。22 節は「求めよ、さらば与へられん。尋ねよ、さらば見出さん」(ﾏﾀ 7:7)からで、加えてヨハネは祈りの接点と方向性を、御言葉が照準を定めると語ります。愛し合う祈りで人が変わり、自分が変わります。知恵と悟りの内なる御霊が、精神と肉体を貫き、難しい人と和合させ、私を通して愛の栄光を現されます。

3月3日

「霊の見分け方」

Ⅰヨハネ4:1-6

武安　宏樹 牧師

前章で偽信者は隣人愛に欠けている、共同体的特徴について説明した後に、本章は彼らが「御子を否定する者」(2:22)との個人的特徴に話を戻しながら、５章までキリストが私たちと同じ人間性を取られた、重要性を説明します。「霊の見分け」は因習の強い地域における、人的地域的な霊的解放の必要から、20世紀終盤より宣教学的に注目され、聖霊の顕著な働きを知らしめましたが、その反面で福音が可視的基準で測られ、人為的になる弊害をもたらしました。パウロもキリストの肢体論で「霊を見分ける」(Ⅰコリ12:10)賜物を明記しつつ、自分の罪深さを偽装するために、聖霊の力を借りて敬虔にふるまうのでなく、真の見分けとは、私たちと同じ人の形で来られた御子の恵みを知ることです。「凡(すべ)ての霊を信ずな」(1節文語)キリストの神性や人性を巡っては、三位一体はじめ神学的議論が積み重ねられ、以上を否定する異端は退けられましたが、今に至るまで惑わしの霊は信者の道を踏み外させて、教会をかき乱すために、聖書全体のバランスを欠いたり、神のことば「である」⇒「となる」と教えたり、聖霊の働きと称して人為的解釈に走ったり、諸霊を「吟味せよ」と警告します。

「人となって(＝肉をもって)来られたイエス･キリストを告白する霊」(2節)こそが信者の真贋をテストする基準です。罪深い我々と同様の肉体を纏(まと)われ、来られたことを救いの恵みとして受け止めて、告白しなければ偽りなのです。偽信者の誤りは肉体を悪い欲望を生む癌として脱ぎ捨て、人間以外の存在になろうとしたことです。「反キリスト」＝「反肉体」。肉体には体と心も含まれ、私たちも情欲や憎しみといった肉の欲を受け入れるより、克服しようとして、苦闘してきた者です。けれども本当に罪深く肉欲に満ちて人間的な私たちと、同じ姿で同じ誘惑に遭い同じく苦しみ、とはいえ罪は犯されなかった御方が、私たちの罪のために死なれた。だから肉体から目を背ければ、自分の罪から目を背け、キリストの肉体から目を背けることになり、ここに惑わしの源が存在します。神がどんなに温かい心で御子を送られ、私たちの罪を犯す場に、憐れみの目を注ぎ続け、断腸の思いで御子を死に至らせたか目を背けるなら、福音の核心から的を外すのです。「告白する」原語は同じことを語る意味です。内なる肉体のキリストが声を響かせ、人間臭く愛し合う交わりを生むのです。

3 月 10 日

「ここに愛がある～This is Love」

Ⅰヨハネ 4:7-12

武安　宏樹 牧師

「ここに愛があるのです」新改訳は 10 節最後ですが原文は冒頭に登場します。「あった」「あるでしょう」などではなく、現にここに愛が存在して流れている、確固たる信仰が、赦されていない罪悪感と満たされぬ心と惑わしを退けます。７節語順は「愛する者たち。愛し合いましょう。互いに」と、'愛' が連続します。６節結語が「偽り」から、「偽り」「愛」キーワードでがっぷり四つ相撲を取らせ、 最後は「愛には恐れがありません」(18 節) と、「愛」に軍配が上がる結果でした。私たちは「愛する者」ですが、果して愛し合っているかと言われると疑問です。愛さなくてはならないけど愛せない、自分のポリシーに照らし愛したくない、同じ屋根の下にいるだけで息苦しい。そういう人が周りに１～２人はいます。「互いに愛し合いましょう。」そう言われても愛したくない！と叫びたくなる。「愛は神から出ている」とヨハネは私たちに動機付けます。人からではない。頼りない人間の努力に根差していない。「全的堕落」私たちは愛に無能力です。愛の無いことを認めて神を見上げないことには、スタート地点に立てません。私に愛は無くても神に愛がある。愛せない者の祈りから神の愛を体験します。

「神は愛だから」(8 節) の理由として、神が私たちに何をされたかが９節です。「遣わし」「示された」不定過去時制で、贖いの御業が十字架一度で完結された、「いのちを得させてくださいました」は、「～ために」と目的に取るべきです。10 節は「私たち」ではなく「神」がと、愛の主体は神であると繰り返しています。隣人を愛そうとする前に、ご自分のいのちを投げ出されて罪から解放された、主の愛を静まり黙想し罪を悔い改め赦しをいただき、受けて終わりではなく、感謝して再献身を誓うところまで扱われ、以上で愛の７割は達成されます。「いのちを得させ」は罪からの救いだけでなく、救われた後の歩みも含みます。私たちは互いに愛し合う目的のために、救われて永遠のいのちを受けました。キリストを見上げることで、愛せなかった人を愛せるようになる奇跡を体験、以前はイエスマンしか愛さなかったのが、迫害者やポリシーの違う人も愛し、彼らの救いのため祈り始める。「愛し合う」「どどまり」(12 節) は現在時制で、愛し合い続ける、とどまり続ける意。「全うされる」は完了時制で、9-10 節の贖いの出来事が今に至る意。神の主導権のうちに私たちの愛は発揮されます。

3 月 17 日

「とどまる愛」

Ⅰヨハネ 4:13-16

武安　宏樹 牧師

「とどまる」「～のうちに」は福音書＆手紙共に、ヨハネお気に入りの鍵語で、ぶどうの木に喩えられた(ﾖﾊ 15:)、主イエスと信者の有機的関係を証します。「キリスト教の真理の骨子が直接述べられており、これは福音の精髄である。」(14 節ﾃｨﾝﾃﾞﾙ注解) 父なる神＆御子＆聖霊に囲まれ、私たちが福音宣教を行う、基本教理も示されながら、聖書全体を貫く「神は愛です」で総括しています。以上の隙間を埋めるように、「とどまる」神秘的交流が理屈と体験を繋ぎます。復活の主は帰天前「全世界に出て行き、すべての造られた者に福音を宣べ伝えなさい」(ﾏｺ 16:15) 自分の世界に安住せず、神の示された地に一歩踏み出せと、命じました。アブラハムも「どこに行くのかを知らずに出て行き」(ﾍﾌﾞ 11:8) 旧約の信仰者も新約の使徒たちも、出て行って敵と戦い魂を獲得し善を行い、陣地を拡げました。教会も同じです。「本教団の存立の目的は～聖霊の力によりキリストの宣教命令に応えて、神の栄光を現す～この目的のために、本教団は、犠牲を惜しまず、積極的な開拓伝道と堅実な教会形成による国内宣教および～国外宣教を推進して、地の果てまで福音を宣べ伝える」(教団教憲前文)

ところが闇雲にどこでも出て行けばよいかといえば、そうではありません。しかしモーセの遣わす斥候隊は、行くべきなのに行かず止められたのに行き、荒野の 40 年のさばきを受けます。主イエスも弟子たちに「待ちなさい」(使 1:4) と命じましたが、十字架で砕かれた弟子たちは失敗せず御言葉を守りました。復活の主の遺言は「出て行け」と「待て」＝「ゴー」と「ストップ」の両輪でした。出て行くために、とどまる。単にとどまるだけでなく、出て行く力を頂く。13 節はヨハネ自身が神のうちに自分、自分のうちに神、二重の愛の交わりを、体験したこと、以上を受けて 14 節で「私たちは、見て、その証しをしています」偽信者を意識しつつ、とどまる御霊から愛に押し出されることを強調します。自分の罪深さや醜さに目を背けるのでなく、聖霊に探らされて「神は愛です」力強く宣言しましょう。私たちは罪意識や焦りや敵対心や誘惑に煽られて、いたずらに出て行ってはいないでしょうか。惑わしの霊はタイミングを外し、急かしますが、雲の柱＆火の柱で導く主の前に、私たちが恐れたり身を隠す暗闇はありません。神の愛にとどまり続けて、出て行く力を充電しましょう。

3 月 24 日

「恐れない愛」

Ⅰヨハネ 4:17-21

武安　宏樹 牧師

「全う」が３回登場。私たちの内に罪の身代わりとしていのちを捧げられた、キリストの完全な愛があるからこそ、数え切れない欠けが覆われ赦し合える。夫婦も親子も牧師＆信徒間も、愛が在るかどうかが価値基準です(ｴﾍﾟ 5:)。神の愛は被造物を通して満ちていますが、私たちの愛により公にされます。「全うする」は主の受難に際し、神の御心全てが成就して「完了した」(ﾖﾊ 19:30)と同じ語です。「恐れ」はさばかれる恐れで、愛による信仰の不足に因ります。反キリストの霊はサウルのように、過去の罪を悔い改めず放置した傷みから、王座を狙われているという猜疑心や、心の浮き沈みに苛まれやがて死に至り、「恐れには罰が伴い、恐れる者は、愛において全きものとなっていない」(18 節)恐れと愛は水と油の関係です。「恐れが少しも取り除かれなくても、私たちが神のもとへ、あたかも安全な、難破の危険も嵐や豪雨の危険も無い港へ向かうように馳せ行く時、恐れは実は取り除かれている。恐れは信仰に道を譲ったからである。神の愛をよく知った時、人々の精神は平穏になるから」(ｶﾙﾋﾞｧﾝ)「締め出す」直訳「投げ捨てる」。信仰成長は神との関係で徐々に深まります。

「私たちは」(19 節)が強調され、「恐れる者は」(18 節)と対比されています。神を愛し人を愛そうとする動機、神のさばきや人の評価を恐れない大胆さは、こんな罪人さえ神が愛されるという、自分でなく神の愛に出発点を置きます。20＆21 節は恐れる者の反応と、恐れつつ神と隣人を愛する者との対比です。難しいのは恐れが誰にでも均等ではないことで、母の胎にいる時から不安定、幼時に親から虐待や他人と違う性質など、人一倍の罪悪感と恐れを抱きつつ、疎外感から身を傷つけ、そういう集まりしか居場所を見出せない人もいます。関わる私たちも彼らに深く思いを巡らしながら、傷つける恐れに苛まれます。人間関係の深みに漕ぎ出すと困難を覚えます。心のどこかで報いを求めます。「愛する」とは何でしょうか。私たちの愛は条件付きの愛になっていませんか。愛のために悩み苦しむことは無意味でしょうか。「愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。」病める人々も、体を外傷や罪を背負う痛みも、以上理解されない孤独感も、御子が傷つき献げた神の愛に不足はありません。恐れが来るたび「アバ、父」(ﾛﾏ 8:15)と叫ぶ、恐れど恐れない愛があるのです。

3 月 31 日

「神は愛です」

Ⅰヨハネ 4:16

武安　宏樹 牧師

① 愛によって造られた私たち（創 1:27-31）

聖書は創造主の神が天と地と全ての動植物、神に似せた特別な存在として、人を造られたことを記します。「神のかたち」は外見に非ず、善悪を判断して、生きる精神のことで、その内奥に神を愛し人を愛する霊性を備えられました。赤子は親に抱かれ乳を吸うことで、愛され受け入れられている実感を得ます。以降も養育しつつ次第に手を放しながら、精神的＆経済的自立へと導かれて、社会のモラルを学びながら家庭を築くのが、基本的なライフサイクルですが、ベルトコンベアに乗せられた人生、悪くなる世界の不条理に疑問を抱きつつ、私たちは自分が何者でどのように社会に参与すべきか、意味を求める者です。

② 愛を壊そうとする私たち（ロマ 1:29-31）

神の最高傑作である人は、本来は神の栄光を現す存在として生きる意味も、完全な道徳も備わっていましたが、最初の人は神に背いて悪魔へと従います。神の愛に背を向け自分の生きたいように生きることを、聖書は罪と言います。これにより神との交わりの部屋が壊れ、金も評価も恋人を得ても満たされず、人も社会も奪い合いを繰り返し弱っています。「罪の報酬は死です」(ﾛﾏ 6:23) 人生の意味を解せず、神から個人的に与えられた恵みを知らずに滅びるとは、恐ろしいことです。人生は神の御手の内に生きることで、初めて見出します。疲れを覚えている人はいますか？ 人生を導くパートナーが不在だからです。

③ 愛を回復される私たち（ヨハ 3:16）

罪人ばかりで争いの絶えぬ世を正すために、神は御子を私たちの代わりに、死刑に処しました。それだけでなく復活させたのは神が人を愛するゆえです。人生の目的と生きる喜びと自分に何が与えられているか、知らせるためです。「第一に、この方がそのよみがえりによって死に打ち勝たれ、そうして御自分の死によって私たちのために獲得された義に私たちをあずからせてくださるということ。第二に、その御力によって私たちも今や新しい命に生き返らされている、ということ。第三に、私たちにとって、キリストのよみがえりは私たちの祝福に満ちたよみがえりの確かな保証である、ということです」(ﾊｲﾃﾞﾙﾍﾞﾙｸ信仰問答 45)
信仰＆希望＆愛こそキリスト者の価値観。最上の愛に応えてキリストの門下生となりましょう。

4 月 7 日

「世に勝つ者」

Ⅰヨハネ 5:1-5

武安　宏樹 牧師

① 愛について

神を愛し隣人を愛することは言うまでも無く、加えて自分を愛することで、キリスト者の基本は「三重の愛」です。反キリストの者たちは肉体を忌み嫌い、罪を否定することで、心の深い部分で自分自身を憎んでいたと思われます。これは「自己愛」とは違います。自分を直視するだけでは愛することはできず、神を愛することで尊い作品とされていること、賜物を与えられていること、自分の過去＆現在＆未来全ての罪のために、十字架で死んでくださったこと。受けた愛をどのように隣人に適用するか、主イエスならどう接するかを想い、それで人を愛し祝福することで、心に神の喜びを感じて信仰が強められます。

② 信仰について

「信じる」は現在時制、「生まれる」は完了時制（過去～現在）であるように、神の救いの計画が在り、選ばれた私たちは時至って聖霊の導きで決心します。信仰は救いの結果で、人間の信頼関係同様に神との愛によって深められます。愛を知っていても信仰が不足すれば、自分の成長する実感が沸いてきません。逆に熱心だけでは消耗します。弱い自分を隠そうと鎧で身を固めるからです。主イエスは自分を投げ出して、恵みの海から喜んで私たちを愛されました。私たちの信仰はどこに根差しているでしょう。神に選ばれ新生した者として、十字架を背負いキリストを信じる実感から、希望の一歩を踏み出しましょう。

③ 従順について

「神の命令を守ること。それが、神を愛すること」（３節）愛と信仰が篤くても、聖書の御言葉に基づいていないと、一時的に実を結んでも倒れてしまいます。聖書はガイドブックや通読やデボーションなど、あらゆる方法で味わいます。今も生きて私たちのうちに聖霊を通して働き、神と人への愛を教え導きます。悪魔は愛と信仰を歪めるだけでなく、聖書信仰の無意味を盛んに惑わします。「勝つ」３回登場の中で、「打ち勝った」が一回完結を現す不定過去時制の他は、現在時制で「現に勝っている」意。洗礼式にて御前での誓約を思い起こしつつ、救われ続けている者として、御言葉で訓練されて愛と信仰を貫きましょう。

4 月 14 日

「御霊と水と血」

Ⅰヨハネ 5:6-8

武安　宏樹 牧師

①　水について

主イエスは、ヨハネが主の民に悔い改めを迫り応答する人々の列に混じり、洗礼を求めます。告白すべき罪も無い救い主に授ければ罪有りとしてしまう。彼はうろたえるも「このようにして正しいことをすべて実現することが、わたしたちにはふさわしいのです」(ﾏﾀ 3:15) 神の義に折れたヨハネは授けました。父の御心を子が行い聖霊が降る。三位一体の御名で洗礼を受くべき根拠です。創造以前の闇の大水に、ノア家以外沈んだ洪水に、敵軍が殲滅する葦の海に、 せんめつキリストは沈まれ私たちも共に沈んだ後に、起き上がり新しいいのちを頂く。そこに降られる聖霊が水だけでなく、炎で練りきよめ愛の人に造り上げます。

②　血について

「水によるだけでなく、水と血によって」強調するところに意図があります。反キリスト者たちが主イエスの受洗は認めても、人として血を流した死を、認めないからです。「血を流すことがなければ、罪の赦しはありません。イエス･キリストのからだが、ただ一度だけ献げられたことにより、私たちは聖なるものとされています」(ﾍﾌﾞ 9-10:) 契約の血＆過越の血＆赦しの完成の血＆きよめの血＆聖所に入るしるしの血。最高の血が信者のうちに流れています。Ｃ型の血が流れ込み愛の人となり、罪と世と悪魔と戦い勝利する人種となり、私たちから循環して、世に和解をもたらすことを覚えましょう(ﾚﾋﾞ 17:11)。

③　御霊について

「御霊と水と血」(8 節) と順番が替わって、機能的に聖霊の主導権を表します。救いを導いて水の中に沈めるのも、体内に血を循環させ世に愛をもたらして、最期は使徒の如く殉教の血を流させるのも、全て執行者は聖霊ということで、キリストの肢体を構成する教会で、水と血を巡らせ建て上げるのは聖霊です。「この聖霊がわれらの心に水と血の証しを封印し堅固ならしめて～私たちの罪の贖いのために流された血が、私たちの魂の中に染み通ってくる」(ｶﾙﾋﾞｧﾝ) 主イエスが受けた洗礼も流された血潮も、地上で信者と共有するものですが、聖霊だけは天から降ります。同じ霊を共有して異なる賜物が与えられている。結果的に私たちに流れるキリストの血は、他の誰とも違うオンリーワンです。

4 月 21 日

「行いと真実をもって愛し合う」

Ⅰヨハネ 5:9-12

武安　宏樹 牧師

① 私たちの証し

「証し～日本のキリスト者」(最相葉月氏著/角川書店)が話題となりました。私たちには身近な語ですが、世の人々にはキリスト者の証しは異次元です。近年はキリスト教メディアが紙媒体や放送だけでなく、YouTube や各種 SNS 等、誰でも発信できる時代になりましたが、顔と顔を合わせて、神＆罪＆救いの福音をはっきりと伝えながら、キリストがどのように私の人生を変えたかを、直接的に語ること以上に効果的なものはありません。世の人々は 200 人中で１人しかいないキリスト者に何故あなたがなったのか？何が週ごと日曜日に教会に足を運ぶ礼拝させるのか？他宗教が売りにする御利益や栄達出世等、際立った要件や、家族が三代四代クリスチャン家庭だからとの慣習でもなく、何があなたを信仰に駆り立てるのか？駆り立てる見えない糸とは何なのか？私たちは敬虔なキリスト者という名の不思議な人種です。救いの経験だけで、10 年 20 年と信仰するには御利益や義理だけでは難しく、やはり何かあります。聖書の動詞の時制で現在形＆完了形が多いのは、そのことを暗示しています。

② 神の証し

私たちは救われました。この時制は過去の御業に基づき重ね合わせるので不定過去時制ですが、私たちは十字架と入信時を単に思い起こすだけでなく、今を生きているので礼拝に集います。とはいえ霊的に常に好調な訳ではなく、過ぐる週も罪を犯してした、夫婦や親子で喧嘩した、友人を傷つけたなどの、あるいは信仰者として存立に関わる危機に瀕している主日も、時にあります。けれども吸い寄せられるように教会に来て、メッセージが断片的に響いたり、賛美の歌詞にハッとさせられ、礼拝後の兄姉との何気ない会話に教えられる。教会内にペンテコステの御霊が働かれるので、よく考えれば当然なのですが、証しは第一に私たちの信仰や霊性でなく、神の与え給う歴史的事実ゆえです。「永遠のいのちとは神ご自身のいのちに他ならない。私たちに約束されていることは、現在ここにおいて神のいのちそのものに参与できること」(ﾊﾞｰｸﾚｰ)証しの主は私たちではなく神。有限なる人間が無限の神を 100%証しはできず、最終的な救いとしてキリストを送られたことが、究極の証しです(ﾋﾟﾘ3:8-9)。

4 月 28 日

「神様はこんな方です」

詩篇 139:1-6

原　敏夫 師

私の目にはあなたは高価で尊い（イザヤ 43：4）の御言葉からわかるように神様は高価で尊いものとして人間を造られました。 では、139 篇を見ていきましょう。神様は私たちの全てを知っておられます（v1-3)。そして見守って下さる（v3）と言っています。神様は私たちに自由意志を与えて下さいました。エバが罪を犯した時に止めることができたはずです。そうすればイエス様は十字架にかかる必要がなかったはずですが、自由意志がなくなったら人間ではなくなってしまいます。人間の尊厳を守るためには罪を犯すことを許されました。しかしその結果は、戦争などとなって表れています。その尻ぬぐいをイエス様はして下さったわけです。神様は私たちを支配されませんが、その尻ぬぐいを神様がされます。神様は私たちの悪い部分も含め、全てを知り尽くしたうえで、愛して下さいます。5 節にはあなたは前からうしろから私を取り囲みとありますが、取り囲むというのは軍隊が町を包囲することで、私たちは神様に完全に包囲されているということを言っています。包囲されていることは、そばにいたい、所有権の主張をしています。

・神様は私たちのことを大好きです。イエス様は私たちの全てを見ていてくださいます。私たちに対して絶大な関心があるから、特別扱いをしています。
・神様はいつも私たちと一緒です。神様は私たちにとって完璧な守護神だから、私たちは孤独ではありません。内側には御霊が住んで下さり、神様が私たちを取り囲んでおられます。
・神様は全責任を取ってくださる。キリストの十字架で私の罪をあがなって下さいました。
・神様はそのままの私を愛してくださいます。この確信を持たないと私たちは苦しくなります。
・神様は私に愛想をつかされない。「神は、世界の基が据えられる前から、この方にあって私たちを選び・・・」（エペソ 1:4）そしてキリストを犠牲にする程、私たちを愛されました。神様はいつも変わらない永遠の愛で私たちを愛されています。

5 月 5 日

「私たちの確信」

Ⅰヨハネ 5:13-15

武安　宏樹 牧師

「福音書と手紙の目的を一緒にするならば、ヨハネの目的は４段階になろう。つまり、読者が聞くように、聞いて信じるように、信じて生きるように、そして生きて知るように」(ﾃｨﾝﾃﾞﾙ注解)が「分からせるため」(13 節)本書の目的です。というのは信徒たちが永遠のいのちの確信について、揺さぶられていたので、以上を体験するには祈りの生活で、キリスト者と反キリスト者の分かれ目は、どのように祈るか。長さや量でなく、祈る対象と的を得た祈りをしているか。祈りは霊的交流なので、主の御名を唱えながらも自分本位の祈りをするなら、悪霊を呼び込んで自分で自分の首を絞め、非常に危険なことにもなりかねず、実際に反キリストは表面的に熱心に祈れど、隣人愛を自己愛に巧妙に替えて、聖霊に敵対していました。私たちは的を得た祈りとなっているでしょうか？若い信者は何でも祈ってスッキリしたり、神の反応を探るのも良いでしょう。けれども祈る対象がどんな方か、運ぶ霊の働きに敏感になることが必要です。

一つ目に、私たちは世界を創造＆統治され、同様に私たち自身も造られて、「探り、知っておられる」(詩 139:)善き御手で治められる聖い神に向き合っていること。大声で身の上話を述べる前に、主なる神は自分も無意識のうちに、心の奥の動機や不信仰やコンプレックスや敵対心等、全て知っておられます。その確信に立てば、対角線に立って挑戦するような祈りは必要無いと分かり、御心を探りつつ立ち位置を合わせ、御手に包まれて祈れば悪霊は退散します。　二つ目に、キリストの御名によって肉なる自分の死と、悪しき陣営の力が打ち破られていることを確信して祈ること。信じていないと山が動きません。「あなたがたがわたしに＆わたしがあなたがたに」(ﾖﾊ 15:7)神秘的つながりで肉体と霊が一体に。主イエスは破れ口で神と人の合一を祈りました(ﾖﾊ 17:)。この赦しと和解の確信に立つことで、初めて隣人をとりなす者となります。

　三つ目に、聖霊が水と血を循環させて(6-8 節)、隣人を愛せるように変えられる確信です。私たちは三位一体の御名で洗礼式と聖餐式に与る共同体で、反キリストが欠落しているのが、愛すべき隣人のため愛して仕える祈りです。常識で考えれば愛せないけれども、聖霊の働きで愛せるように備えられます。愛せない弱さを御前に告白するなら、聖霊が視野を拡げ暗闇に光を与えます。

添付ファイル

5 月 12 日

「死に至らない罪」

Ⅰヨハネ 5:16-17

武安　宏樹 牧師

「死に至らない罪」「死に至る罪」聴く者におどろおどろしい表現が並びます。霊的な死のことで、「罪の報酬は死」(ﾛﾏ 6:23)全ての罪は死に至るものですが、死に至るのはいかなる罪のことか？①特定の罪②背教③聖霊を汚す罪など、議論されてきましたが、線引きよりも主体の反キリストを念頭に置きながら、14～15 節と同じ動詞で「神に求めなさい」(16 節)祈りの方向性を重視します。かつて「兄弟」として親しい交わりにありながら、教会を去って交わりを断ち、惑わしに加担する厄介者にも、いのちの蘇生を期するための高度な祈りです。

「このような罪を犯している兄姉の救いのための祈りは『キリストのからだである教会全体の完全を求める祈り』(ｳｪｽﾄｺｯﾄ)なのです。私たちが本当にキリストにある兄姉であるならば、本当にキリストにあるいのちの交わりを持っているなら、キリストの血潮によって贖われた私たちの兄姉が、目の前で滅びに陥っていくのを見て、憐れみの心をかき立てられず、祈りにおいて神の御前に出て、その兄姉の救いのために、いのちのために願い求めることをしないほど冷酷＆無情になることは出来ないでしょう。兄姉のためのとりなしの祈りこそが、主キリストにある交わりの特質です。」(田中剛二師説教集)

私たちは教会を離れて滅びようとしている兄姉のため、どれほど祈ったか疑わしいでしょう。良い人と悪い人、役に立つ人と有害な人、愛のある人と無い人、など付き合う価値のあるか無いかを、私たちは瞬時に判断したがり、悲しいかな捨てた人の方が断然多い。それが世の社会通念かも知れませんが、恐ろしいことに教会も毒されて、まともな信者が弱い人をさばいて締め出し、帰りの道筋を踏み出す気力さえ奪ってはいないか。効率化の波に晒されつつ、難題＆難しい人と関わるよりも、前向きで数字に表れることにシフトして、専門家に任せた方が合理的との、歪んだ教会論が神の愛と聖さを後退させ、「あとは神に委ねましょう！」決め台詞で、無責任な委ね方をしてはいないか。無限の天上の教会を有限の地上の教会に反映すべく、神学や戒規を尊ぶのも、必要な営みですが、果して逸脱し迷惑かけた者の復権は不可能でしょうか。説明が困難ですが、神の愛に不可能が無いことを覚えて悔い改めましょう。

5 月 19 日

「偶像から自分を守る」

Ⅰヨハネ 5:18-21

武安　宏樹 牧師

本書最終回。ヨハネの神学＆教会論が、終末を生きる私たちに悔い改めと互いに愛し合う実践を求めています。「私たちは知っています」３つの宣言と、最後に遺言として愛をもって厳粛に「子どもたち、偶像から身を守りなさい。」戦うべき相手は人間でなく、神との関係を断とうと惑わす偶像だと語ります。私たちも古い自分や内なる偶像を恋い慕い、足を引っ張られていませんか？

一つ目に「神から生まれた者はみな罪を犯さない」(18 節)そうは言っても、実際の私たちは罪を犯す者です。「生まれた」は過去の新生から今に至るまで聖霊によって新しくされ続けている、「犯さない」は習慣的に犯し続けない意。「キリスト者は罪の力から解放されている。現実に罪を犯さないのではなく、救いようもない罪の奴隷とか犠牲者にならないという意味である」(ﾊﾞｰｸﾚｰ)主ご自身が強力な「お守り」になられるので、苦しい時に偶像に心を向ければ、「ねたみの神」(出 20:5)が私たちを打たれ、主だけ信頼するように仕向けます。

二つ目に「私たちは神に属しています」(19 節)「この世は邪悪と腐敗しかないのだから、信者たちは神に従うため、必ず血と肉を捨てなければならない。しかしもう一つの点、すなわち彼らを呼んだのは神であること、これは彼らが神の助けを世と悪魔の全ての策略に対して使うことのできるため」(ｶﾙﾋﾞｧﾝ)「私たちはこの世から神の御国の民として召され、神から出ている者として、いわば再び新たに悪魔の支配下にある、世に遣わされたのです」(田中剛二) 神を愛し世を憎むなら大胆に弱さを見せて、人に近づき世の深みに下れます。

三つ目に「神の御子が来て、真実な方を知る理解力を私たちに与えてくださった」(20 節)動詞「来て」「与えて」はキリストの贖いから現在に至り脈々と、その結果「真実な方を'知る'」は現在進行形で知り続ける意。「～うちに」から、私たちは何処に居るのか。罪を犯し御顔を避けて隠れたアダムは挙動不審の放浪者となり(創 3:)、以降の人間の腐った知性は、神に届く文明を築かんと、日夜金と権力の結集のため律法違反を重ね、偶像を拝み神の怒りを重ねます。神を愛し隣人を愛する「知性」(ﾏﾀ 22:37)で、聖霊は神と人を結び合わせます。

5 月 26 日

「向きを変えて出発せよ」

申命記 1:6-7

面 舜　師

来年で戦後 80 年。本日は、元牧師が経験した福音派の過去と現在について、検証しつつ、神学者の視点ではなく、身近な視点から教えられたことを考えたい。

「１１日」(2 節)はエジプトを出てカナンの境界まで要する日数だが、「４０年」(3 節)要したのは「主の目に悪を行った」(民 32:13)アロンが金の子牛を造るなど(出 32:)、神に逆らいどうしであったため、その結果、「十分長くとどまった」(6 節)≒彷徨(さまよ)った。「向きを変えて」(7 節)＝悔い改めて。「出発せよ」アラバ･･･大河ユーフラテスまで、いわゆる約束の地カナンへ。行くに及んで、「命令を守りなさい」(11:8,13,18,22,27)。⇒神の命令を守らぬゆえ 40 年を荒野で過した、同じ轍を踏まないようにとの親心。かの地は「祝福の地」(11:11,14,23-25)であり、天からの恵みが降り注いでいる地。

戦後の福音派は急成長し、私が救われた 1970 年もこの勢いはまだ残っており、聖書の教えに着実に歩んでいた。現在はどうか？その指標を社会から見てみる。1) 「地の塩、世の光」(ﾏﾀ 5:13-14)クリスチャンは社会に影響を及ぼす責任がある。2) 「すべてのものを･･･満ちておられるところ」(ｴﾍﾟ 1:23)教会に世界の一切があり、教会から道徳倫理を発信する必要がある。3) 「キリスト者の社会的責任」(1974 年ﾛｰｻﾞﾝﾇ誓約第 5 項)地の塩は個人的色彩が強いが、良い社会運動に働きかける。　いずれにしても社会の縮図は教会の姿であり、責任の所在についても一体的。社会で暴力や詐欺が日常化し、地方公共団体がパワハラ等ひどい状態にある。以上の日本の現状と酷似した記述がイザヤ 59 章(7-8 節：暴力/13 節：倫理の欠如)。教会に目を転じると「聖書信仰」＝聖書は誤りなき神のことばを旗印として告白も、私の牧師時代に思わされたことは、聖書の強調している部分が語られていない。①聖霊の問題(とくに「力」)②さばきの問題。これらを指導者は語ろうとしていない。

イザヤ 59 章の続き⇒「さばき」(17-18 節)、聖霊の臨在(19 節)、贖われた者(20 節)教理が欠けると子孫が「福音はこの様」と思う。上に立つ指導者の責任は大きい。律法遵守とは聖書信仰に立ち、隅々まで解説して子孫に責任を持ちうる聖書観。行くべきカナンとは神の国。霊とまことの礼拝者は、どこでも祈ることのできる場で(ﾙｶ 17:21)、神の国は聖と義の状態も指し示す。カナンには恵みがあふれている。聖霊臨在を教会(集団)で受ける喜びに勝るものなし。これぞリバイバルであろう。

6 月 2 日

「真理と愛のうちに」

Ⅱヨハネ 1-3

武安　宏樹 牧師

本書は第三の手紙とともに新約聖書で最短で、背景と内容は第一の手紙とほぼ同じです。「長老」とは教会役員のような役職でなく、先方と同じ立場で神と教会に仕える老信徒で、「選ばれた婦人」とはキリストの花嫁たる教会を、「子どもたち」とは信徒を差し、「私はあなたがたを本当に愛しています」(1 節)老ヨハネは白髪と皺の笑顔で語ります。「本当に」は４節まで各１回登場する、「真理」と同語で直訳は「真理の内に」(共)。情緒的な愛でなく歴史的事実から、客観的基準と信仰に基づく愛です。真理は聖書の知識や体験や悟りのようで、「知っている」とは入信～現在までを通して、砕かれ悔い改め感謝する歩みが、伴うことで初めて自分のものとなり、真理を知る結果として愛が生まれます。「私たちのうちに(in us)」とどまり、「私たちとともに(with us)」在るのだと、隣人愛を生み出すための真理を、生き生きと内に住む聖霊として表します。「愛なしに真理を主張するとき、それはどこか歪んで伝えられてしまいます。一方、愛は真理の裏付けなしに、正しい方向性を持ち得ません。私たちがこのバランスを得るために、向かうべき方はイエス･キリストです。」(遠藤勝信師)

２節最後「私たちとともにある」は、原文は３節文頭で繰り返されています。「真理」の重箱の包みを解けば、三段重ねの「恵みとあわれみと平安」が見える。「この挨拶は願いでも祈りでもなく、『恵みとあわれみと平安があなたがたにあるであろう!』という宣言である」(W･ﾊﾞｰｸﾚｰ)私たちには高嶺の花の真理が、「恵みとあわれみと平安」を体験するフィルターを通し、隣人愛に結実します。「『恵み』とは、受ける値打ちも要求する権利も無い者に与えられる、神の主権的で絶対的に自由な愛。この一方的な愛ゆえに私たちは救われたのです。『あわれみ』とは、この世の生活にあって、私たちが気落ちした時の希望、悲しみに居る時の慰め、苦難を受ける時の忍耐、死の床にある時の平和など、私たちの救いに伴って、私たち一人一人の状態に応じて注がれる恵みです。『平安』とは、『恵みとあわれみ』が私たちに注がれている結果で、３つに私たちが必要としている全ての幸福＆祝福は含まれています」(田中剛二師)キリストの真理と愛を、恵み⇒あわれみ⇒平安の順に五臓六腑染み渡るまで、主との交わりに充てることで、私たちは「本当に」人を愛することができます。

６月９日

「行き過ぎない」

Ⅱヨハネ 4-11

武安　宏樹 牧師

９節「先を行って」。以前の訳は「行き過ぎて」、他は「先走って」「越えて」(協)私たちは熱心のあまり、やり過ぎ＆言い過ぎで害を与えて失敗するものです。

①「行き過ぎ」事例

最初の人は残念なことに悪魔に唆され、食べてはならない知識の実を食し、人は死ぬべき存在と堕しました。この木は本質的には人が食べるべきですが、神は知識と御言葉を結びつけ、人は神と共に歩んで善悪を知ると教えました。けれども彼らは目に見える景色と惑わす声を、神の戒めよりも優先させて、越権行為の罪を犯し、代償は霊的断絶と己の非を認めない高慢でした(創 3:)。二つ目にモーセ率いる主の民はカデシュにて、敵は見るからに手強いと臆し、不従順の罪を犯しただけでなく、「40 日⇒40 年」のさばきを受け止めず抗して、とにかく動こうと、さばきを逃れカナンを先取りしようとします(民 13-14:)。三つ目に預言者を待てず、命じられない礼拝を捧げたサウルの愚(Ⅰサム 13:)。以上の事例に共通するのは、善い行いでも主の時でないタイミングで強行し、悲惨な実を刈り取ることで、私たちも振り返りとへりくだりとが必要です。

②「行き過ぎない」事例

アブラハムは信仰によって故郷を離れ、主が告げられたとおり出て行って、実子を献げよとの「あり得ない」命令を受けます。代わりの犠牲は見当たらず、手を上げた瞬間に神が制し、御言葉に従う彼の信仰が称賛されます(創 22:)。少年ダビデは強大な敵に対し御名の誇りから、兄の怒りや王の説得に拘らず、立ち向かい勝利(Ⅰサム 17:)。人間的に越権行為で無鉄砲＆蛮勇と思われても、神の選びは年数や地位や能力を超えることを、エレミヤやマリアに学びます。彼は酷い仕打ちを受けても王に仕え、御手の中で主従関係を尊んでいました。バプテスマのヨハネは主イエスの先を行く者でしたが、先輩面するどころか、エリヤかキリストかの世論を拒否して、主の道を備える役に徹します(ﾏﾀ 3:)。キリストの半歩先を歩めど、彼の目は半歩後を歩み、最期は斬首となります。王への反抗という世の越権行為が、時に神の前に正義となることもあります。破門者ルター＆火刑者フスの上に、プロテスタント 500 年史は立っています。 世の価値観に安住せず主から先走らず、信仰の一歩で常識を打破しましょう。

6 月 16 日

「行って、直接話したい」

Ⅱヨハネ 12-13

武安　宏樹 牧師

本書結部「あなたがたのところに行って、直接話したいと思います。」(12 節)ここに使徒たちが開拓した教会の信徒たちへ、深い愛情が込められています。新約２１もの書簡が自ら「紙と墨で」書いたか、あるいは口述筆記などを通し、篤い祈りのうちに投じられ、現代に置き換えれば電話＆メール＆LINE なども、通信手段にはそれぞれ長短があり、意図したことを伝える限界が存在します。ひと時代前の牧師はハガキや便箋で、有難く温もりの伝わる達筆を頂戴して、近年はワープロ主流ですが、推敲できるのと手元に残るので手紙は貴重です。200 年前に固定電話、40 年前に携帯電話、ガラケーからスマホでＳＮＳもと、急速に便利になった反面、既読スルーを邪推されたりと隙間の無い昨今です。当教会も LINE グループで週報や諸報告を事前に一斉送信、欠席者も読めます。役員会も第一主日の会議を待たずとも、小さなことは即日決裁が可能となり、教団や宣教区などの会議も、コロナ禍のリスク低減から Zoom 使用が普及して、時間＆労力＆費用も削減されました。私たちは恵まれた時代に生きています。逆に言えば通信手段が過多となり、付き合い方と休息の自己管理が必要です。

文明は進歩しても、「口と口で」(直訳)「顔を合わせて」(以前の訳)会って、話すに優るものはありません。オンラインは受け答えの表情や間が分からず、大事な話は言うまでも無く、肩の力を抜いた交わりも、会うことに代え難い。新約時代は手紙しかないのもありますが、使徒たちは会うことに熱心でした。「あなたがたの顔を見たいと、なおいっそう切望しました。それで私たちは、あなたがたのところに行こうとしました。しかし、サタンが私たちを妨げたのです～あなたがたこそ私たちの栄光であり、喜びなのです。」(Ⅰテサ 2:17-20) パウロの言葉に愛とフットワークを見ます。離れても祈り続けていましたが、信徒たちの苦境を聞いて現地へ行きたかったのに、どうしても行けなかった。交わりは、行って＆一つ所に集まって＆語り合い＆祈り合うことが基本です。オンラインも適宜活用すべきツールですが、それだけでは弱くなってしまう。人間関係は共に過ごし、心から語り合い、受け入れ合い、慰め励まし合いで、行って分かること、話してみて自己の悩み苦しみの深い話題に及ぶものです。訪問＆傾聴＆伝道＆交わりを、牧師も信徒も共有して教会は強固になります。

6 月 23 日

「よそから来た人たちのため」

III ヨハネ 1-8

武安　宏樹 牧師

本書の背景は第一＆第二同様ですが、第二が教会の信徒たち宛なのに対し、第三は教会の指導者的立場のガイオ宛で、ヨハネは彼を高く評価しています。冒頭 11 語中３語も「愛」から、個人的愛情に加えて誇るべき人物と分かります。教会の現場で異端の嵐の防波堤に苦闘し、教会や健全な教えから離れる者や、影響された者から批判を受けたり、その大変さは察して余りあるものですが、彼に世話になった兄弟たちからの耳にする感謝から、御心に適った奉仕には、必ず実が結ばれて、彼の右腕となって祈り仕える者の存在を知らされます。苦しみと協力を通して、福音宣教とキリストの肢体は建て上げられるのです。「よそから来た人たち」(5 節)⇒「旅人」(ﾏﾀ 25:33/ﾍﾌﾞ 11:13)「他国人」(ｴﾍﾟ 2:19)寅さんの如きフラフラとした放浪でなく、「御名のために」旅立った人々です。「旅人をもてなすことを忘れてはいけません」(ﾍﾌﾞ 13:2)家庭も仕事も捨てて、異教徒から何も受けず「主の恵みにゆだねられて」(使 15:40)伝道する彼らに、面識なくても御使いをもてなすように家に通し、ガイオは愛を示しました。そのことが送り出す＆受け入れる両教会の、励ましと徳を建て上げたのです。

教会には彼のように、批判され顧みられなくても主の愛で与えようとする、外向きな人がいる一方で、ディオテレペス(9 節)のように自己愛的＆病的に愛の業を妨げる残念な人々もいて、指導者は忍耐しつつ愛を語り続ける他にありません。そういう困った者たちは悪の軍勢だと一線引くのは簡単ですが、支援者も反対者も主の民である共通項を探りたい。「幸いを得る」(2 節)には、「成功する」「繁栄する」意があり、一歩間違えば現世利益になりかねませんが、語源は「良い旅をする」から派生して、神との関係でも世でも幸いを得ます。したがって人は全て旅人であり、イスラエルもエジプトで在留異国人として、現地の人々にすがって生きて来たことを思い起し、彼らも同じようにせよと(ﾚﾋﾞ 19:33-34)ペテロも「あなたがたは旅人、寄留者」(Ｉﾍﾟﾃ 2:11)と語ります。私たちは選ばれた旅人であり、世では最低限の持ち物と評価で良しとして、自分を守らず、周囲の声に思い悩まず、財産や家族さえ私することをしない。パウロはローマ書 12 章で、献身⇒キリストの肢体⇒愛の奉仕へ論を進めます。自分が何者で何を目指し何をすべきか熟知し、忠実に行う彼に学ばされます。

6 月 30 日

「善を見習いなさい」

III ヨハネ 9-15

武安　宏樹 牧師

ヨハネの手紙最終回。旅人をもてなし忠実な指導者ガイオとは対照的な、「かしらになりたがっている」頑なで病的な、ディオテレペスが登場します。 彼を放置すると教会が混乱するか、ガイオが疲弊する危機をヨハネは感じて、一言で言えば人格的問題がありました。第一＆第二のような神学的異端では、ありませんが、狭くて我が強いカルト的手法で自分のやり方を踏み絵にして、認める人は優遇し認めない人は追い出す、反論を許さない恐怖政治の様です。専制的リーダーほど小心で、恐れに囚われ、その反面で頭と口はよく回って、優しい信徒ほど巻き込まれる傾向にあります。ガイオの方が序列は上位でも、年齢や社会的地位や言葉はディオテレペスが上で、振り回されたでしょうか。使徒が戒告に出向くなど介入が必要でした。おそらくガイオは若かったので、もてなしなど奉仕を忠実に行いましたが、気が優しいのか言葉足らずなのか、厄介者と対決に気が進まなかったのか、心許なかったのではないでしょうか。けれども教会の主キリストは、若くて弱い指導者にあらゆる助けを備えます。それが使徒たちの後ろ盾や、おそらく本書を持参した善者デメテリオでした。

「ヨハネはデメテリオを推薦するのに、三重の証明に訴えています。第一は、『すべての人たちの証言』で彼の品性＆働きは、どの教会の兄姉にも定評があった。第二に真理そのものの証明で、彼の全生活を見ればどのように主を信じて、いのちの交わりを持つ者であるかが、はっきり分かるというのです。第三にヨハネ自身の証明を付け加え、単なる人間的＆個人的な証言ではなく、主にある一つのいのちの交わりのうちにある彼が、御霊によって証言します。信仰と愛、信仰と倫理の生命的統一を示す、実際的な教えです。」（田中剛二師）　福音は信じる者の人格を通して現れます。ディオテレペスの霊的な暗さをガイオに証するには、対照的なデメテリオの人となりから自明とのことです。第二の手紙は教理的行き過ぎ、第三の手紙は運営的な行き過ぎが問題ですが、いずれも神との関係に問題があります。私たちはどのように適用すべきか、一つ目に十戒に照らして「ほかの神」がないか、人を傷つけたりしていないか、チェックリストに用いることです。二つ目に恵みに照らし出過ぎていないか。落ち着いて正義と恵みのうちに歩めば、最初は一人でも理解者が得られます。

7月7日

「進んで献げる心」

出エジプト 25:1-9
武安　宏樹 牧師

本書を大別すると、出エジプト(1-17:)、律法賦与(18-24:)、幕屋(25-40:)。分量の割に前の二つに比べて扱いが少ないですが、幕屋から学んでいきます。

① 神が住まわれるための幕屋（８節）
雷鳴と稲妻と厚い雲が山上に、角笛の音が鳴り響く戦慄の光景を目にして、恐れる民を残してモーセはアロンと共に会見に上ります。民は聖別の必要と、衣服を洗うことを命じられた上で、興味本位で見ようとして死なないために、一線を引かれました。その恐るべき臨在を覚えるため幕屋の構造があります。門は東に一つだけ(ﾖﾊ 10:9)、庭の東半分は民が出入り可能な礼拝者の広場で、その中央に毎朝夕に献げられる祭壇があり、西側の聖所は洗盤の水で手洗い、その東 2/3 は祭司が入れますが、最奥の西 1/3 は至聖所で年１回大祭司が入る、特別な場所で、その中で十戒を記した二枚の板を収める箱は最も重要でした。「幕屋」は「住む」派生語。「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた」は、天幕を張る意です(ﾖﾊ 1:14)。旧約時代に至聖所は一つでしたが、新約時代は、信者の数だけ存在します(Ⅰｺﾘ 3:16)。「いつでも＆どこでも＆だれにでも」と、私たちはコンビニ礼拝をしていないでしょうか。罪への甘さと恐れの不足は、主がねたみの神ゆえに災いを招きます。皆さんは聖い恐れに満ちていますか。

② 進んで献げる心（１～２節）
幕屋設営のための資材を、心から進んで献げることが求められています。人でも金品でも強制徴用は不可です。ダビデが神殿建築の準備をしたときも、自ら喜んで提供を申し出た上で、民の主体性に委ねていますし(Ⅰ歴 29:5)、第二神殿の時も神の御手が民を奮起させて、立ち上がっています(ｴｽﾞ 1:5-6)。これに対してソロモンは「役務者を徴用」(Ⅰ列 5:13)。やり手だったのですが、人間的な方法論は罪を引き起こし(Ⅰ列 11:)、王国分裂の遠因となりました。教会の献金や奉仕も同様で、強いられてでなく進んで献げているかどうかを、振り返る必要があります。聖い恐れと自分から献げる心はつながっています。けれども神が恐るべき恵みにあふれる方であると、正面から受け止めるなら、貧しい寡婦のように献げずにいられません(ﾏｺ 12:41-44)。パウロは語ります。「いやいやながらでなく、喜んで与える人を愛してくださるのです」(Ⅱｺﾘ 9:7)

7 月 14 日

「ともしびを絶えず」

出エジプト 27:20-21

武安　宏樹 牧師

①「ともしび」

「あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。」(詩 119:105)二枚の板に記された十戒のみことばは至聖所の箱の中で、垂れ幕の向こうに、みことばに導く燭台は聖所側に。私たちを照らし一対一に向かわせる光です。私たちの内に光があります(ﾖﾊ 1:5)。「あなたがたは世の光です。」(ﾏﾀ 5:14)と、主が言われたのは、光源ではなく土の器の中から闇の世へと照らすからです。朝に夕に祈りを捧げながら、自分は果して世の光なのかと不安になります。それは未だきよめられていない闇の部分で、30 度しか照らしていない光を、向き直って 360 度照らされることで、なおもみことばへと向かわせるのです。

②「絶えず」

ともしびを絶やさぬよう油の注ぎが必要で、聖霊の象徴として登場します。干からびた霊に油注がれたことはありますか。油を注ぐことは私たちの奉仕、注がれることは天から。全身全霊を主に向けながら奉仕と恵みとが相俟って、注がれます。「キリスト」の語源から、私たちキリスト者は油注がれた者です。油を注がれた火が、至聖所手前の香壇へと移されて祈りの香が立ち上ります。か細い祈りで始まっても、視野が開かれ闇が照らされ、引っ張られるように、祈りが導かれる経験はありませんか。迷いの雲消え、不思議な確信が来ます。「常喜(じようき)祈(き)感謝(かんしや)」(Ⅰﾃｻ 5:16-18)絶えざる奉仕に絶えず油注がれ主に近づきます。

③「整える」

原語では軍事的な備え(ｴﾚ 46:3)、イサク奉献時の薪を並べる(創 22:9)など、整頓し備えることに用いられます。私たちの奉仕は整えることで始まります。毎週のルーティンを忠実に行うことが、主に向かう姿勢と結びついています。試練や重たい課題を抱える時は、出来ることから手をつけると祈りの展望が、開かれていきます。私たちは絶えず油を注ぎ、それ以上に主から油を注がれ、整えるのは私たちです。「大祭司は自分自身を弱さを身にまとっているので」(ﾍﾌﾞ 5:1-4)アロンは神と人の間に立ちながら、不名誉な失態を犯すも(32:)、子孫はヨハネです(ﾙｶ 1:5)。弱さのうちにも力づけられて主に仕えましょう。

7 月 21 日

「三つのいけにえ」

出エジプト 29:10-18

武安　宏樹 牧師

①「罪のためのいけにえ」（１０～１４節）

無意識に、故意でなく、故意でも情状酌量の余地や、儀式的汚れなどで、全ての祭の日に全会衆のため献げられ、本章では祭司たち＆レビ人の聖別に。他が雌の羊や山羊に対し、祭司は立場の重さで若い雄牛１頭が要求されます。雄牛の頭に手を置き自分たちの罪を移すことで、罪の赦しの恵みを受けます。祭壇上と宿営外の二箇所で焼くのは、真のいけにえなるキリストの予表です。「キリストは聖なるものとされる人々を、一つのささげ物によって永遠に完成されたからです」(ﾍﾌﾞ 10:14)律法と比較するとキリストの偉大さを悟ります。どれほど祭司は罪意識に苛まれながら、真打登場を待ち望んだことでしょう。私たちの悔い改めも空しい心で、神に近づくことに挫けていないでしょうか。

②「全焼のいけにえ」（１５～１８節）

名前通りに祭壇上で焼きつくされ、贖いの意以上に礼拝者が主に対して、全く明け渡されて聖別される目的で、毎朝夕規則的に献げるべきものです。「あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として」(ﾛﾏ 12:1)このいけにえからパウロは、キリストにある真の献身について勧めています。これに対してサウルが不在のサムエルに代わって、勝手に献げたいけにえは、自分の利害に従った結果です（Ⅰｻﾑ 15:）。私たちの霊･心･体はどうでしょう。自分が最も大事なものを献げて、愛情や憎しみも十字架につけていますか？赦しは当然に献身に導かれます。教職も信徒も朝に夕に主に献げましょう。

③「和解のいけにえ」（１９～３６節）

前二つは前段階に過ぎず、これが任職本来のいけにえです。その語源は、「完成」「完全」「平和」。神と和解した者が感謝と交わりを表す自発的な祭で、燃やすのに適した部分だけ主への火のささげ物、残りは人々が食べて楽しみ、奉献者＆招待者の祝宴に提供されました。神はご自分の民を養ってくださる。会見の天幕に仕えるレビ人の如く、相続地無くても相続分は用意されます。「何も持っていないようでも、すべてのものを持っています」(Ⅱｺﾘ 6:10)この自由度の高いいけにえは信仰が問われます。苦しみにしか思えぬ試練さえも、主が私を造り変える機会だと、感謝につなげる信仰こそ最善のいけにえです。

7 月 28 日

「主がいつくしみ深い方」

詩篇 34:1-10

山下 亮 師

本篇に記されている「味わい 見つめよ。主がいつくしみ深い方であることを。」ということばに照らされて、主がいつくしみ深い方であることを私たちが日々どのくらい味わい、見つめているか、振り返ることができたらと願います。

1～3 節では、サウルにいのちを狙われるという困難の中にあっても、ダビデは、助けを与えてくださる主を賛美すると告白しています。そしてダビデのその賛美は、共にいる者にも喜びと励ましをもたらしているのです。私たちも、困難の中にあるときにも、主が与えてくださる恵みに気付かされ、主を賛美し、主から力と励ましを受け取る者とされましょう。

4～7 節では、「私が主を求めると 主は答え 私を救い出してくださった」というテーマが取り扱われています。私たちが主を求めるときに、私たちといつもともにいてくださる主が、助けてくださるのです。ここで大切なことは、「私が主を求めると」ということです。私たちから主体的に主を求めることは、主が与えてくださっている恵みに気付くための大切なステップなのです。助けを与えてくださる主に、祈り求めて歩みましょう。

8～10 節では、「味わい 見つめよ。」という呼びかけをもって、主がいつくしみ深い方であることを味わうようにして経験し、見つめて理解するようと聖書は私たちに勧めています。そのいつくしみ深い主を恐れ、礼拝する者は、良いものに何一つ欠けることがないのです。

私たちを救い出してくださった主がいつくしみ深い方であることを日々味わい、見つめて、主の恵みの内に歩み続けましょう。